サシバ舞う空

石垣幸代
秋野和子

さんごしょうの海に囲まれた小さな島に、タルタという少年が、ムサじいと二人で暮らしていました。

暑い夏が終わり、❶ミーニスの吹き始める❷寒露の頃になると、タルタの島には空が真っ黒になるほど、たくさんのサシバがやってきます。サシバは、渡りのタカです。新しい季節とともにやってくるサシバの群れを、島の人は皆、心待ちにしています。そんな寒露の日に生まれたタルタに、ムサじいは毎年きまって、こんな話をするのです。

「タカが、タルタを連れてきてくれたさー。」

そして空を見上げながら、こう言います。

「タカはね、遠い北の国からやってくるさー。あの小さなタカがねー、海のまん中では、羽と羽を組み合わせて、一羽の大きな鳥になって、海を渡ってくるってよー。」

タルタは、その大きな鳥に会いたいと思いました。

今日は寒露の日です。タルタはムサじいと一緒に、いつものように海沿いの畑にでかけました。十月とはいっても、か

んかんと照り始めた太陽に、二人の体は汗びっしょりです。一瞬、タルタの体を、冷たい風が吹き抜けました。びっくりしてタルタが顔を上げると、大空に、大きな鳥が翼を広げています。

「ムサじい、鳥だよー！　大きな鳥だよー！」

でも、白い雲が南に走っているだけで、ムサじいには何も見えません。しばらく空を見上げていたムサじいは、心地よい風に目を細めながら言いました。

「いい風だねー。今日あたり、来るかもしれんねー。」

その日の午後、そわそわと、タルタは空ばかり見上げていました。太陽が光の帯を空に放ち、西の海に傾き始めると、涼しい風が吹きだし、辺りは夕暮れどきの優しさに包まれていきます。そのときタルタは、西の空に真っ黒な雲が湧き出したのを、誰よりも早く見つけました。黒い雲は、みるみるうちに大きくなると、南の空いっぱいに広がりながら島に向かってきます。

「タカだよー。タカが来たよー。」

タルタもムサじいも、島の人たちは皆、仕事を放り出して、

「タカ③どーい　てぃんぐ　てぃんぐ。

タカどーい　てぃんぐ　てぃんぐ。」

次々と声をかけ合い、踊るように、サシバの降りてくる海岸のアダン④林へと走りだしました。タルタは芋づるを頭からかぶると、アダン木に登って立ち上がりました。目の位置がぐんっと高くなって、海の向こうに揺らいでいる真っ赤な夕日が、目に飛び込んできました。その光を覆わんばかりに、次々と現れる黒いサシバの群れが、タルタを体の芯から、ぷとぅぷとぅ揺さぶります。タルタは知らぬまに、ぶるぶると震えていました。

見上げると、空一面に、サシバの大群が飛び交い、ぐんぐんタルタに近づいてきます。

「来たぞ！」と、低い声が聞こえたとたん、翼が風を切る音が、激しさを増してきました。

①ミーニス　秋の訪れを知らせる初めての北風のこと。沖縄の古語では「ニシ」が「北」の意になり、「ミー」は新しいの意である。「ミーニシ」と発音する地域もある。

②寒露　太陽暦の十月九日頃。

③タカどーい　てぃんぐ　てぃんぐ　「タカだよー。」の意。「てぃんぐ　てぃんぐ」はかけ声。

④アダン　タコノキ科タコノキ属の常緑小高木。亜熱帯から熱帯の海岸近くに生育する。葉は煮て乾燥させたあと、細く裂いて糸とし、じょうぶであるため、ヒモにしたり、カゴを編む素材にしたりして利用される。

低く滑るように飛んできたサシバが、ふわっと舞い上がり、大きく翼を広げて、ムサじいの頭の上に止まろうとしたその瞬間、ムサじいの手がサシバの足をつかみました。そして、翼（つばさ）ごと、アダンひもでくくりつけました。次々と、サシバは降りてきます。獲物を捕まえた喜びが、暗さを増したアダン林のあちこちから、タルタにも伝わってきます。

タルタの周りから一切が消えうせ、サシバの群れが送り出す空気の震えだけが、びんびんと伝わってきます。

『タカー。僕に、降りてこい。』

タルタが心で叫んだときです。黒々とした大きなうねりのようなサシバの群れが、タルタの頭の上を覆ったかと思うと、その中の一羽が、あっと叫ぶ間もなく、タルタの腕の中に、飛び込んできました。タルタは無我夢中で、サシバを抱き止めました。ムサじいは、自分の目が信じられませんでした。サシバが人の腕の中に飛び込んでくるなんて見たこともありません。

家に戻ると、タルタはムサじいに言われて、逃げないように、サシバの足にひもをつけました。

「おじい、このタカ、青目（オーミー）だよー。」

「ああ、いい目だ。大人になる前の若いタカだ。」

初めて自分で捕まえたサシバです。タルタは、うれしくて

たまりません。どきどきしながら、小さな魚を差し出しました。するとサシバは、目をむき、口をかっと開けて、タルタに向かってきます。

「タカはね、誇り高い生き物だよ。そう簡単に、人の手から餌は食わんさー。」

ムサじいが、言いました。

その晩ムサじいは、自分が捕まえたサシバを潰して、タカジューシー[5]を作りました。食べながら、ムサじいは言いました。

「ミーニスが吹き始めると、風邪をひきやすくなるからね。くりゃ、一番の栄養。天の神さんはよう知っておられて、わしらにごちそうをくださる。ありがたいことよね。」

タルタは、熱いタカジューシーを、ふうふうと言いながらたいらげると、そっと納屋をのぞいてみました。サシバは止まり木の上で、身動きせずに眠っていました。

次の日から、タルタはサシバの近くで寝起きして、餌を食べさせようと、一生懸命でした。けれど、あれこれ餌を変えても、サシバは鋭い目でにらむばかりで、何も食べません。三日めの朝、「食べなきゃ、死んじゃうよ。ほら！」タルタは泣きそうになって、まだ動いているバッタを差し出しました。でもサシバは、首の毛を逆立て、にらみつけ、タルタに襲いかからんばかりです。タルタはどうしていいかわからず、納屋の前に、座りこんでしまいました。

しばらくして、一匹のトカゲが、タルタの足もとからサシバの方へ歩きだしました。次の瞬間、サシバの鋭い爪がトカゲを押さえつけ、食べ始めました。タルタの手からはどうしても食べなかった餌を、自分で捕って食べているのです。

タルタはサシバを、小高い丘の上に連れ出しました。サシバは、ひもをつけたまま上手に、草むらのバッタを捕まえて食べています。広い世界が、サシバの体に喜びを与えたのでしょう。「ピックィー！」サシバが、ひと声鳴きました。タルタはうれしくて、思わず「ピックィー。」と、応えて言いました。

「僕は、タルタ。おまえの名前は、ピルバだよ。」

その日から、タルタは片ときも、ピルバから離れようとしませんでした。夜は納屋で、ピルバの止まり木の下で休み、ムサじいの畑仕事を手伝うときも、ピルバを連れていきました。仕事が終わると、ピルバに引かれるように、沼地や野っ原に行き、二人っきりで過ごしました。鋭い目でバッタを見つけ、急降下しては飛びかかるピルバ。ピルバの後を追って、

[5] **タカジューシー**　タカの肉を入れて作る雑炊。

タルタも走ります。鋭い爪でノネズミをつかみ、押さえつけ、食べるピルバを、どきどきしながらタルタは見つめます。日の光を浴び、風に乗る……こうして、数日が過ぎました。

いつのまにかタルタは、ピルバと同じように、サシバの舞っている遠くの空を見つめることが多くなりました。

日ざしがやわらいで、誘うような風が吹く夕方になると、島の子供たちは、自慢のサシバを連れて浜に集まり、サシバの飛ばし勝負をしています。そのざわめきから離れるように、タルタとピルバは、丘に上っていきました。二人の目の前には、南の海と空が、どこまでも続いています。そのとき、ずんと、風がタルタを打ちました。

ずん、ずん、ずん。

風が打ちつけるたびに、体の芯がむずむずします。

ずん、ずん、ずん。

今度は、体が風をつかみ、力みなぎると、タルタは空を見上げました。

空の青、深く、吸い込まれるような大空です。

タルタの両の手が風を受け、タルタは、青の中へ吸い込まれていきました。はるか下に、青い海が広がっています。青一色の世界で、タルタの体は風をつかまえて、どこまでも昇っていきます。すぐそばを、たくましく成長し、金色の目をしたピルバが、飛んでいます。

「ピルバ、見て！　僕、空を飛んでる！」

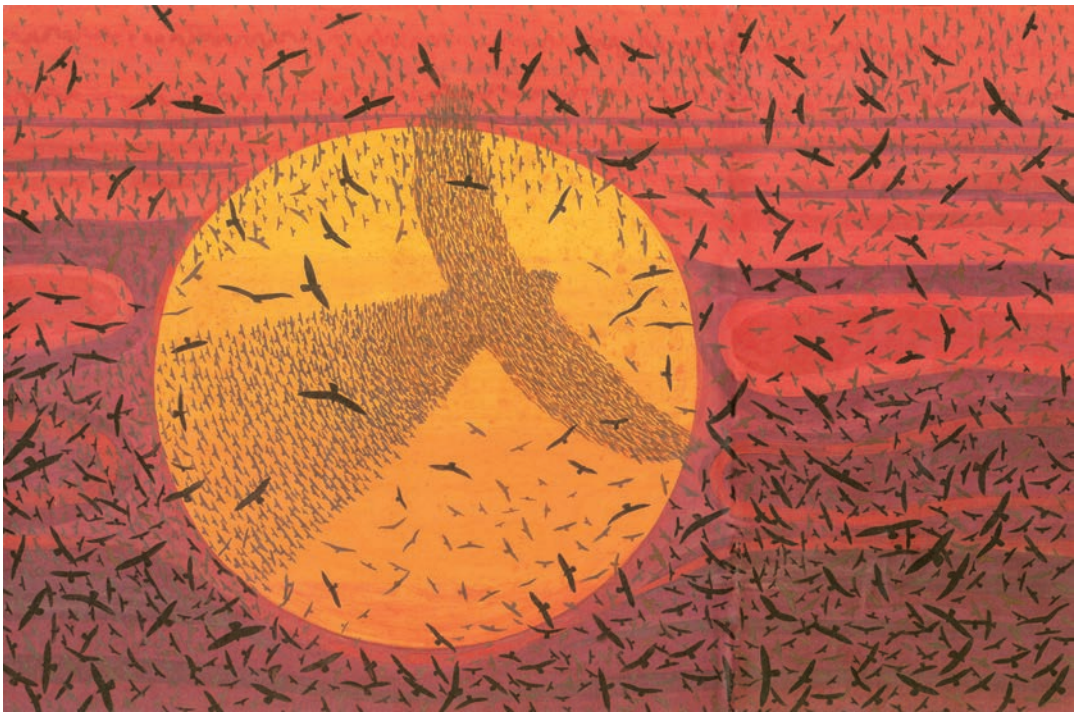
うれしくて、うれしくて、飛んでいるのを確かめるように、タルタは、翼をはばたいてみせました。

空の高みに昇りきったタルタたちは、今度は一直線になって、ぐんぐん前に進んでいきます。いつのまにか、タルタの前にも、横にも、後ろにも、翼をもったものたちが、一つになって、風に乗っています。背に受ける日の光が温かさを増し、タルタは体中でしびれるような喜びを、感じていました。そのとき、タルタの耳に、ピルバの声が聞こえました。

「南へ、南へ、もっと南へ！」

その声で、タルタは、はっと我に返りました。すぐそばで、タルタを見守っているピルバに気づくと、タルタは手を差し伸べ、ピルバの足のひもを外しました。すぐには飛び立とうとしないピルバの羽を、タルタはそっと名残を惜しむように、何度も、何度も、なでました。すべすべして、滑らかではじけるようなピルバの体。

ピルバの、命の鼓動が、タルタの鼓動と一つになったとき、ピルバは、大空に舞い上がりました。ピルバの翼を夕日が黄金色に染め、その上空では、今日島に渡ってきたサシバの群れが、悠然と舞っています。誘うように、タルタの上を回っ



ていたピルバは、「ピックィーッ！」ひと声鳴くと、高く高く舞い上がり、サシバの群れの中へ消えていきました。

いつのまにか後ろの方で、子供や大人がサシバを見上げ、輪になって、話しかけるようにうたっています。

タカどーい　てぃんぐ　てぃんぐ
うふわがやーや　んざが　んざが
多良間（たらま）ーぬ　ぱいぬかーた
やらうぎ　すたんぎヨー
まいの　まいの
うぬタカ　んみごーや　ばが　むてぃどお
やーにぬさむ　さなりーぬさむ

タカだよー
あなたの家は　どこ　どこなの？
❻多良間の　南の方
❼ヤラブの木の下の方よ
舞えよ　舞えよ
このタカの群れは　私のものよ
来年も　再来年もよ

❻**多良間**　沖縄県の宮古（みやこ）島と石垣（いしがき）島の間にある離島。
❼**ヤラブ**　和名はテリハボク。オトギリソウ科の常緑高木。亜熱帯から熱帯の海岸近くに生育する。

タルタは、サシバの群れが集まって夕日と重なり、影絵のように大きな鳥になっていくのを、いつまでも見つめていました。

その晩、タルタの体は、火のように熱くなりました。

「ピックィ、ピーックィ！」サシバが鳴くような叫び声をあげたかと思うと、両手を広げはばたき、まるで大空を飛んでいるようです。

「タルタの魂（たましい）は、ここにはもうないさー。サシバのところに飛んでいったかもしれん。」

ムサじいは火を起こし、タルタを引き戻せないかと、タルタの周りを回りながら、手を合わせ祈り続けました。

次の朝まだ暗いうちに、タルタはぽっかり目を覚ますと、そのまま浜に降りていきました。そんなタルタを、ムサじいは黙って見送りました。

砂浜には、飛ばし勝負をしたあとの、サシバの羽が散らばっていました。タルタは、その羽を拾い集めると、真っ白い砂の上に、一羽、また一羽と、差し込んでいきました。

やがて砂の上には、今にも飛び立とうとしている大きな鳥の姿が、浮かび上がりました。

かんかんろろー。

風が、吹き抜けていきます。

渡りの季節も、もう終わりです。

そのとき一羽のサシバが、タルタの肩に舞い降りました。

「ピルバ、もう行くんだよね。」

「ピーックィー！」

ピルバは鋭く鳴くと、さっと、空へ舞い上がりました。ピルバに応えて、アダン林から、サシバが湧き出るように次々と飛び立ちました。

高く高く、渦を巻くように、ぐんぐん大空へ舞い上がったサシバの群れは、やがて、帯のように長くなり、南へ向かって動き始めました。

「ピルバー、ピルバー、ピルバー！」

タルタは叫びながら、白い砂浜を、ピルバを追って走りました。

白々と明け始める白い光の中で、海と空は、青い姿を現しました。そのとき、いったん大空に消えたサシバの群れは、あの大きな一羽の鳥になって舞い戻ると、タルタをふわっと持ち上げました。

かんかんろろー。

風が、吹き抜けていきます。

その風に乗って、大きな鳥はぐんぐん高くなり、やがて南の空に消えていきました。

〈出典『サシバ舞う空』／絵・秋野（あきの） 亥左牟（いさむ）〉

【著者】**石垣 幸代**（いしがき さちよ）
一九五一（昭和二六）年―一九九六（平成八）年
絵本作家。沖縄県の生まれ。
【著書】『はまうり』（共著）など

【著者】**秋野 和子**（あきの かずこ）
一九四五（昭和二〇）年―
絵本作家。岡山県の生まれ。
【著書】『はまうり』（共著）『とうもろこしおばあさん』『ムースの大だいこ』など

- これまでに読んだ物語と違う印象をもったところや不思議なところなどについて、話し合おう。
- この物語の中の人々の生活の様子について考えたことをまとめ、話し合おう。